

## 寅彦の見た風景 10【未来との出会いのまち-本町筋編】

野村 学

○「(略) 家ヲ出テ先ヅ村岡書店ニ至リ新定習画帖セノ下アリヤト問フニ無シ 又此処ヲ出テ小川書店ニ至ル (略)」(明治 25 年 5 月 15 日の日記より)

○「村岡書肆二行キ Huxley's "Last half Century"ヲ注文シテ帰ル」(明治 29 年 3 月 17 日の日記より)

### はじめに

寅彦先生の高等小学校から尋常中学校時代の日記を見ると頻繁に本屋へ足を運んだことがわかる。手紙を通じて東京の丸善や外国の出版社ともやり取りをしている。「書物に含まれているものは過去ばかりではなくて、多くの未来の種が満載されている」とは寅彦先生の言葉であるが(※1)、寅彦青年にとって本屋はまさに“未来の種”との出会いの場であったに違いない。手にした本を通じてどのような未来を見たのだろうか。今回はその本屋の跡を訪ねてみたい。

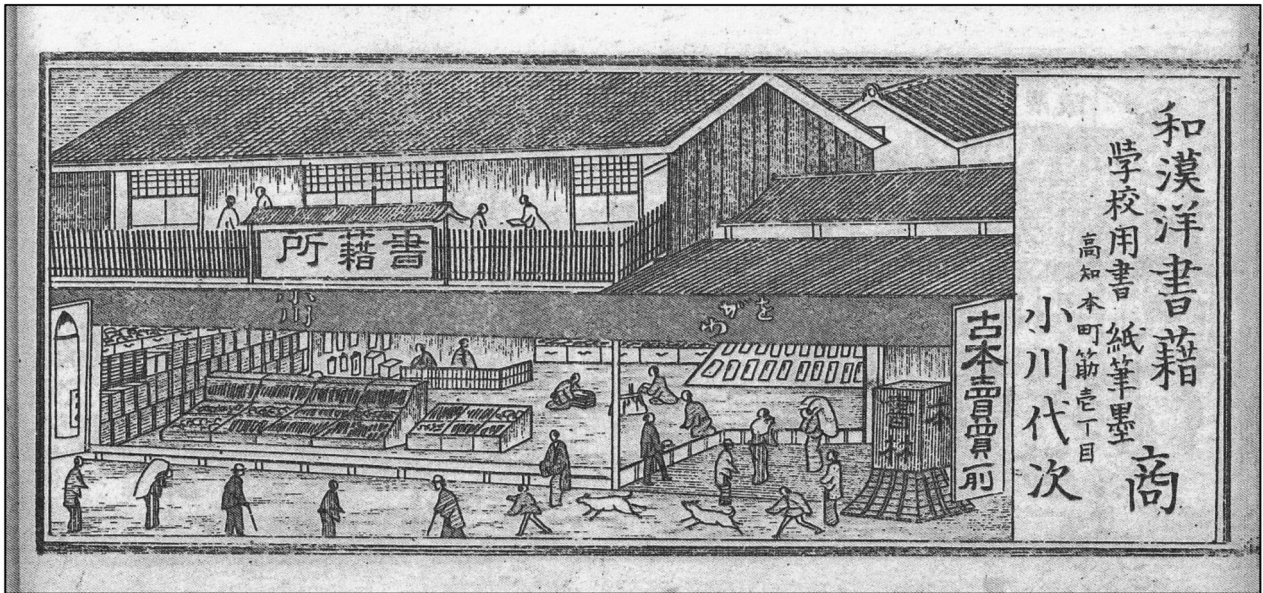
### 本屋のあった場所-本町筋-

当時(明治 25 年、明治 29 年)の日記には“小川書店”や“村岡書店”の名前が見える。これらの書店はどこにあったのか。『近代文献調査マニュアル別冊』(※2)には「明治前期書肆・出版人リスト」として「小川代次 高知市本町筋百四十一番地」、「村岡栄助 高知市本町筋三十六番地」の名前・住所が挙げられている。時代と所在地から推測して、本町筋に店を構えるこの 2 人が、それぞれ「小川書店」、「村岡書店」であろう。寅彦日記に、例えば「本丁村岡書店ニ行キ」(明治 29 年 3 月 18 日)などとあることがこれを裏付ける。「本丁」は「本町筋」のこと。「本町筋」は現在の高知市上町の電車通りである。なお村岡書店は日記中では村岡書肆、村岡書林などとも表記されている。

### 当時の本屋

寅彦先生の通った本屋はどのような店構えだったのだろうか。何か資料はないかと探しているとき、高知県立高知城歴史博物館で特集展「ぼくらの明治維新～庶民が見た新時代～」(会期：平成 30 年 8 月 4 日から 9 月 7 日)が開催されていることを知った。参考になるかもしれないと思い行ってみることにする。会場では『南陽高知商工便覧』(※3)という明治 20 年に出版された本が展示されていた。解説には当時の「高知と伊野の商家を紹介する本」とある。その中から播磨屋町の「時計・洋品店」や本町の「せっけん屋」など当

時の商家がいくつかパネルで紹介されていた。会場では本屋の紹介はなかったけれど、この本ならもしや、と思い、後日、オーテピア高知図書館の所蔵する『南陽高知商工便覧』を閲覧してみた。予想した通り。果たして「和漢洋書籍 学校用書 紙筆墨 商 高知本町筋壱丁目 小川代次」と書かれた頁<sup>ページ</sup>を見つけた。これが明治25年5月15日に寅彦少年の訪れた小川書店だろう。オーテピア高知図書館の許可を得て下にその箇所を掲載する。



【小川書店の図（『南陽高知商工便覧』オーテピア高知図書館所蔵）】

店の間口は2階建て部分が3間から3間半、右の平屋部分が2間ほどであろうか。平屋部分は土間になっている。ここから店内へ上がり込むのだろう。当時の本屋は土足ではなかったようだ。店舗の左側に筆の絵、右側に古本売買を示す看板がみえる。加えて「本」、「書林」と書かれた箱看板が設置されている。2階に目を移すと縁側には「書籍所」と横書きされている。建物の右3分の1ほどは平屋で、通風または明り取りのためだろうか、越屋根となっている。『丸善百年史』（※4）という本に当時の本屋の様子を活写した次のような記述がある。「客は土間に立ち、また椅子や上り框に腰を掛けて、店員に書籍の名前を云って注文すると、店員はこれに応じて、階下の書棚や二階の書庫から書籍を取り出したものである。冬は火鉢を、暖くなると大きい煙草盆を出して接待した。」上の図からもその様子がうかがえる。描かれた人々の一人ひとりを観察し、その中に寅彦青年の姿を想像するのは楽しい。

#### 寅彦青年の読んだ本

これら本屋で寅彦先生はどのような本を買っていたのだろうか。日記からいくつか拾い上げてみよう。まず紹介したいのは村岡書店を通じて手に入れた「Huxley's "Last half Century"」。これはトーマス・ヘンリー・ハクスレイ著『THE ADVANCE OF SCIENCE IN

THE LAST HALF-CENTURY』のことだろう。明治 29 年 3 月 17 日に注文、4 月 4 日に到着している。訳すと“過去半世紀の科学の進歩”といったところか。次に注目したいのは『東洋学芸雑誌』。明治 29 年 4 月 5 日に『東洋学芸雑誌』174 号が自宅に届けられた。この 174 号に「独逸ナル Röntgen 氏ノ發明ニカ、ル X 放射線ヲ応用シテ氏ガ自ラノ手ノ骨肉ヲ分明ニ撮写セルモノノ縮写写真板」（明治 29 年 4 月 5 日の日記より）が掲載されていた。「巻首第一二人目ヲ驚カスニ足ルハ（略）」（同日日記）と記しているように、寅彦青年はこの記事を見た時、さぞかし驚異したことだろう。後年この『東洋学芸雑誌』に寅彦先生の地質や気象を中心とした論文が掲載されることになる。中学生時代に読んだ科学雑誌に自分の論文が掲載されたとき、どのような思いを持っただろうか。いずれにしても、この頃寅彦青年は、書籍や雑誌を通して広く科学に触れていたことがわかる。

その他にも『日本少年』または『日本ノ少年』、『少年世界』や『太陽』などの雑誌、『Les Miserable』や『Gulliver's Travel』などの英語の小説を読んでいる。『中外英字新聞研究録』などという書物も購入しており英語の勉強に余念がない。一方「そのころ近所の年上の青年に仏語を教わろうとしたことがある」（※5）というエピソードを裏付けるように『French without master』というフランス語の独習本も購入している。寅彦青年の興味はとどまることを知らない。もはや高知の書店を通じただけでは寅彦青年の好奇心は満足させられなくなっていたのかもしれない。

### さらに広い世界へ

日記を見ると寅彦先生は、東京の丸善やさらに外国の出版社とも手紙でやり取りしていたことがわかる。例えば、明治 29 年 3 月 3 日に丸善へ『Ball's Experimental Mechanics』を注文、3 月 7 日にはアメリカの出版社であろうか、Messrs Sporets Afield Publishing Campany や Mr. H. A. Strong. Pres and Treas. of Tacoma Founddry & Machine Co. などへ手紙を出している。一体何を問い合わせたのだろう。明治 29 年日記にはこれ以外に 5 回ほど外国へ手紙を出したことが記されている。

面白いのは蓑田先生の下宿を訪れた後、程なくして丸善へ雑誌「Cosmopolitan」の定期購読を問い合わせていることだ。日記を見てみよう。

○明治 29 年 4 月 24 日「本町延命軒ナル箕田教員ヲ訪問ス」

○明治 29 年 5 月 4 日「此日丸善書店へ手紙ヲ出ス」

○明治 29 年 5 月 8 日「此日丸善書肆ヨリ返書来ル Cosmopolitan ハ 一ケ年七円位ニテ十月ニ限り注文ニ応ズトノ事ナリ」

時系列的には蓑田先生宅の訪問が契機となったように見えるが果たしてどうであろうか。

前出の『丸善百年史』には「丸善の古老には、実に記憶のいゝ人が居るが、その中の一人で、明治三十七年から大正七年ごろまでドイツ書を担当していた、福本初太郎の記憶によると、大体次のような名士・知識人が来店して、洋書を漁っていたものようである。」という興味深い記述があり、123 名の名士・知識人が挙げられている。そしてそのなかに寺田寅彦の名前があることを発見した。これを見つけたときは嬉しかった。

もうひとつ『丸善百年史』からのエピソード。随筆「丸善と三越」に紹介されている符牒“アンカナ”のことである。

「あのころには書物の値段は正札でなく一種の符牒で記してあった。もっともその符牒はたいてい誰でも知っていたので、秘密の暗号でもなんでもなくただ数字の代りに片仮名を使ったというだけのものではあった。例えばアンカナというのは一円二十五銭の事であったが、これが自分の頭によく残っている。」（「丸善と三越」）

『丸善百年史』にこの符牒の解読方法が説明されている。それは以下の通り。

「一寸販売価格の符牒についてコッソリお知らせしますと、誰が考え出したか知りませんが、一から十までをアカサタナ、ハマヤラワに当てています。例えば一円二十五銭なら「アンカナ」十円なら「アワン」と云う工合に。」（『丸善百年史』）

つまり、ア=1、カ=2、サ=3、タ=4、ナ=5、ハ=6、マ=7、ヤ=8、ラ=9、ワ=0 となる。「アンカナ」が 1 円 25 銭、「アワン」が 10 円ということから推測して「ン」は単位の[円]を表しているのだろう。つまり、ア[1]・ン[円]・カ[2]・ナ[5]=1 円 25（銭）、ア[1]・ワ[0]・ン[円]=10 円となる。「丸善と三越」には「神田の古本屋で買った書物の、裏の見返しの隅に片仮名で書いた符牒をよく見かける」とある。わたしも古書に記されたこの符牒を目にしてみたいものだと思う。できれば寅彦先生の「脳髓の隅の方に刻み付けられている」（※1）という“アンカナ”を。

### 訪問記

それでは寅彦青年行きつけの本屋のあったまち・旧本町筋を訪ねてみよう。旧本町筋へ行くには江ノ口川沿いに桜馬場から柵形商店街を南下するルートが最短である。歩けば汗ばむような陽気の冬晴れの午後 1 時、寅彦邸を徒歩で出発。10 分ほどで電車通り（上町 1 丁目・旧本町筋）に出る。このあたり柵形を介して東の本町との接続点であり上町の起点となる場所でもある。

西に向けて旧本町筋を歩く。通りには寅彦青年のときにはなかった自動車や路面電車が



頻繁に行き交い、空には電線が張り巡る。戦後拡張されるまで電車通りは12メートル幅だったそうだ(※6)。今と比べるとずいぶん狭い通りである。土電が枡形(乗出し) - 堀詰間で運行を開始するのは明治37年のこと。高層建築の商業ビルが林立する本町に対し上町(旧本町筋)は個人経営の店舗が目立つ。歩きながら私は考える。青年時代の寅彦先生の心に「広い世界への憧憬の炎」(※7)を燃え立たせたものにはどんな物があっただろう。例えば、蓑田先生の下宿部屋でみた旅行鞆や外国の雑誌。蓑田先生そのもの。英語を教えてくれた楠さんとレモン・エッセンス。フランス語を教授してくれた青年。そして本屋。明治20年代、「田舎の小都市」に住む青年にとって本屋はどんな意味を持っていたのだろうか。『書店の近代』(※8)には次のようにある。「まぎれもなくこの時代にあつて、書店とは単に書物と出会う場所だけでなく、そのなかに秘められた思想や世界との出会いのトポスを意味していた」。寅彦青年にとってもまさにそうであつたろう。

こんなことを考えながら歩いているうちに、いつの間にか5丁目に出た。旧本町筋は5丁目と旭町と境を接して終りとなる。途中3丁目と4丁目の間を北へ向かう道は車瀬橋を渡り、旧小高坂村西町から北町を經由して旧江ノ口村大川筋へと通じる。後年、すなわち大正15年7月31日の夕方、帰省中の寅彦先生を朝倉まで訪ねた宇田道隆青年に“古い思い出の地は皆のぞいて来ました”と語った場所を辿る道である(※9)。本町筋との行き来にはこのルートを使うこともあつただろう。この魅力的な道については別の機会に歩いてみたい。今日は元の道を引き返す。

引き返しながらかつて再び考える。私の歩いた1丁目から5丁目まで約1キロメートルの間には現在本屋は1軒もない。小川書店あるいは村岡書肆ほどのあたりにあつたのだろうか。例えば小川書店について前出『南陽高知商工便覧』には「高知本町筋壺丁目」とあるので今の上町1丁目のどこかだろうか。正確な位置は分からないけれど、寅彦少年または青年に「鋭い歓喜の情」(※1)を味わわせてくれた本屋たちがこの町のどこかにあつたことは確かだ。「田舎の少都会の小さな書店」(※1)を通じて得たもののいかに大きかつたことだろう。「グリムやアンデルセンで賑やかにふけていった」(※5)明治二十年代の田舎の冬の夜のどんなに幸せであつたことだろう。風景に馴染んだ電車の音を聞きながらそんなことを思う。そして通りの向こうに書棚を物色する寅彦青年の後ろ姿を想像した。12月の日暮れは早い。手帳に「未来との出会いのまち」と書き記し、私は本町筋を後にした(※10)。

### おわりに

明治の自由民権家・植木枝盛に「未来が其の胸中に在る者之を青年と云ふ」という言葉がある(※11)。この定義に従えば、書物を通じて多くの未来をその胸にいっぱい吸い込んだ寅彦先生は、この時期、確かに“青年”であつた。そして“未来の種”から芽吹いた“不思議”を生涯心の中に持ち続けた寅彦先生は、最後まで“青年”であつたといえるだろう。

〈参考文献・引用文献〉

※本文中の日記は『寺田寅彦全集 第十八巻』(岩波書店・1998年)から引用

※1「丸善と三越」(『寺田寅彦全集 第七巻』・岩波書店・1997年)

※2『近代文献調査マニュアル 別冊』(国文学研究資料館 調査収集事業部・2015.05.31増訂)

※3『南陽高知商工便覧』(上田利十郎編集・龍泉堂・明治25年)

※4『丸善百年史 上巻』(飯泉新吾・丸善・昭和55年)

※5「読書の今昔」(『寺田寅彦全集 第三巻』・岩波書店・1997年)

※6『清水真澄伝』(平尾道雄・高知市民図書館・昭和50年)

※7「蓑田先生」(『寺田寅彦全集 第一巻』・岩波書店・1996年)

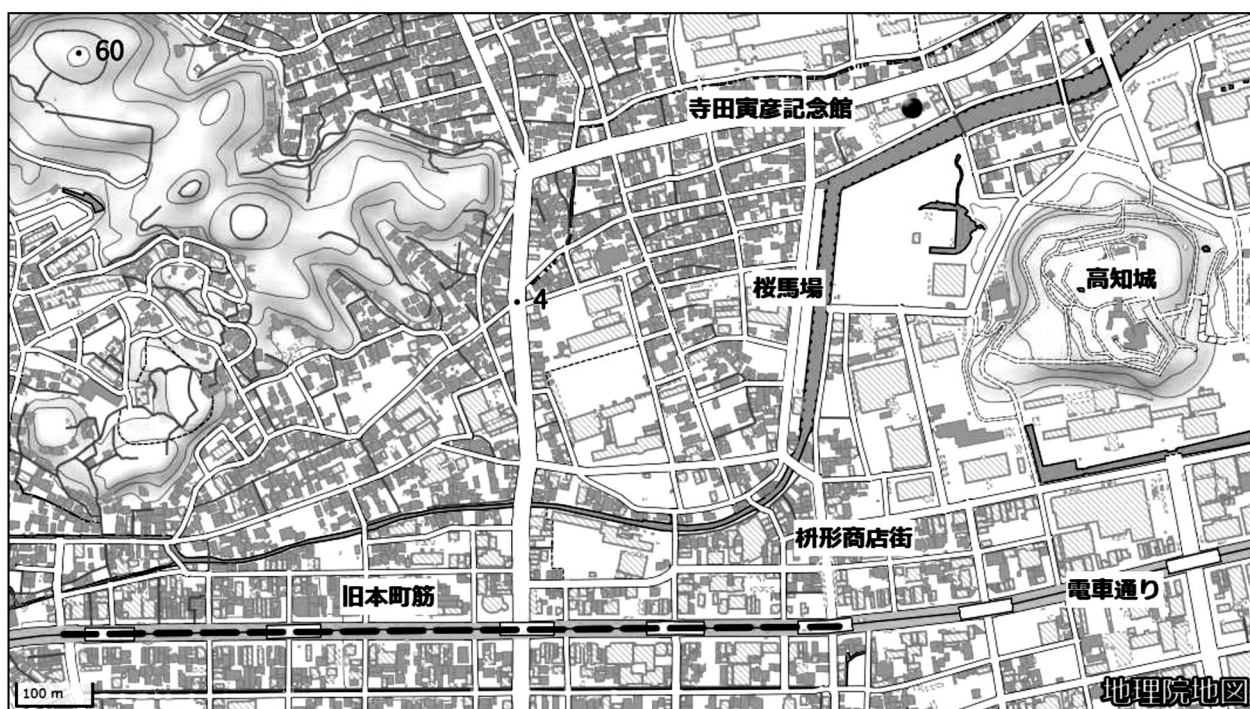
※8『書店の近代』(小田光雄・平凡社・2003年)

※9『寺田寅彦との対話』(宇田道隆・弘文堂・昭和25年)

※10最後の一行は野田宇太郎氏の『新東京文学散歩 上野から麻布まで』(講談社文庫・2015年)中の表現を参考にしました。

※11『植木枝盛 無天雑録』(家永三郎/外崎光広編・法政大学出版局・1974年)

※小川書店の図についてオーテピア高知図書館に掲載の承諾をいただきました。記して感謝いたします。



〈文学散歩地図 本町筋〉